授業形態	演習	科目名	ソルフェージュＩＡ	必選区分	必修
開講学科・学年	大演１年		受講者数	約 10 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み ☑ 意欲・関心を高める取組み ☐ 発言を促す取組み ☐ 時間外学習を促す取組み ☐ 学習態度を良くする取組み ☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	リズム感覚が悪い学生のために、リズムパターンを書いたプリントを作成し、初見でリズム打ちさせる。これを毎回行い、一人づつでも行う。最初は前から始めるが、出来るようになれば後ろの小節から前に戻る等、ランダムに行う。				
取組みの効果	最初はリズム感の悪い学生も、自覚のもとに復習を繰り返すことでパターンに慣れて初見能力、集中力ともにアップした。				
今後の課題	専修分野に反映させること。				

授業形態	演習	科目名	イタリア語表現演習	必選区分	選択
開講学科・学年	大演１年		受講者数	約 15 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み ☑ 意欲・関心を高める取組み ☐ 発言を促す取組み ☐ 時間外学習を促す取組み ☐ 学習態度を良くする取組み ☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	音楽を通してイタリア語を学ぶというより語学の授業と捉えているため、宿題として覚えるだけでなくリピート練習を多く取り入れた。例文を主語だけ、形容詞だけ、冠詞と名詞だけをリズミカルに変化させ、リズムを感じながら言葉に接するようにした。子音の発音練習においても、ソルフェージュのようにリズムの変化をつけながら練習をした。				
取組みの効果	リピートをリズム感を利用して学んだ受講生は、演奏学科の故か、言葉のリズムの変化を楽しみ、語学との連携を感じられたのではないか。しかしリズムと言葉を繋ぐことが難しい受講生は、同じことを何度も繰り返すだけの単純な作業で、退屈し練習を怠ったと思われる。				
今後の課題	英語で苦労した学生が新しい語学を始める際のトラウマを減らす方法を模索している。もっと積極的で良い意味での自己主張ができるよう、間違いを怖がらない方法を探したい。				

授業形態	演習	科目名	重奏演習	必選区分	選択
開講学科・学年	大演３年		受講者数	約 10 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み				
	☐ 意欲・関心を高める取組み				
	☐ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	☐ 学習態度を良くする取組み				
	☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	まずはじめの授業で、初見で簡単な曲のアンサンブルをさせてみる。自分のパートが弾けないと、全く相手の音や息、動きを感じられず合わせることが出来ないため、その次の授業までに、いかに個人的な必要であるかを実感させる。 ほとんどの学生が、歌の伴奏の延長のような気持ちでいるため、室内楽が両者とも対等な関係で作り上げるべきだということを、何度も説明している。				
取組みの効果	選択科目であるため、１回目の授業で何となくやってきた学生の中では、相当練習が必要であり、自分の主専実技と並行することが難しいと感じると履修をやめる者もいるし、意欲的に頑張る学生も多い。				
今後の課題	最近は、入学する学生の演奏能力のレヴェル差が大きく、同じ曲を課題に与えても進行状況に差がつき、なかなか授業を進めるのが難しくなっている。今後さらに読譜能力を見極めてから、課題にも工夫を凝らすことが必要かと思われる。				

授業形態	演習	科目名	ピアノアンサンブル	必選区分	選択
開講学科・学年	大演４年		受講者数	約 15 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	☑ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	□ 学習態度を良くする取組み				
	□ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	演奏学科４年生を対象とし、ピアノを使ったアンサンブルを行う授業であるが、前期と後期の最後の授業に音楽館ホールでの発表演奏を行っている。一昨年度までは非公開（親しい友人のみ招いていた）だったが、昨年から公開にしてチラシも受講学生に作成させることにした。授業では、演奏解釈がこちらの押し付けにならぬよう、学生が曲をどう作りたいか問いかけながら進めていくように工夫をしている。				
取組みの効果	本番の演奏に対する責任感が生まれ、学生が積極的に合わせ練習に励むようになった。学生が自分たちで演奏解釈を考えて演奏に生かしていくようになった。				
今後の課題	発表演奏を公開にしたものの、観客が少ないことが課題である。チラシを多く作り、他学部の学生に宣伝する方法も検討したい。 履修している学生には、公開演奏するからには優れた演奏をするという意欲をより強く持って演奏に臨んでもらいたい。				

授業形態	実技	科目名	主専実技Ⅰ	必選区分	必修
開講学科・学年	大演１年		受講者数	約 10 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	□ 意欲・関心を高める取組み				
	□ 発言を促す取組み				
	□ 時間外学習を促す取組み				
	□ 学習態度を良くする取組み				
	□ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	声楽の指導を仰ぐ者にとっての最大の困難は、楽器が自己の身体自身であることである。自分の声を客観的に聴くことが不可能な点は、他の楽器奏者と決定的に異なる点であり難しくなる要因である。 これまで私自身が学生時代に受けてきたレッスンでも、感覚的、抽象的な表現が多く見られ、頻繁に戸惑いを覚えたものであった。 そこで、自己の経験を踏まえ、私が指導する実技レッスンでは、人体（殊に発声に直接かかわる部位）の図解を用いたり、効率的かつ有用な身体訓練を取り入れるなど、学生自身が客観的に自己の身体を俯瞰する能力が培われるように、より具体的、理論的に指導した。				
取組みの効果	どのような方法で指導を行おうとも、自己の体を自在にコント―ロールできるようになることは、そうたやすいことではない。理論を頭で理解することは比較的容易だが、こと身体で体現し実践できるまでには、それ相当の時間を要するものである。 しかし、上記の方法を用いるようになってから、各学生の発声のみならず、演奏に対する姿勢や自覚がしっかりとし、その結果各自が自分の声を自在にコントロールできるようになり、演奏能力の向上に繋がるという大きな効果をもたらすことができた。				
今後の課題	個人レッスンという授業形態ゆえ、常に各々の学生の状態を（音楽的のみならず精神面なども含め）総合的に観察し、的確なアドバイスを与えることができるように、また間違っても自己の理論に溺れ、邁進することのないように自らを戒めながら、今後も指導にあたっていく所存である。				

授業形態	実技	科目名	主専実技	必選区分	必修
開講学科・学年	大演１～４年		受講者数	各１名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み ☑ 意欲・関心を高める取組み ☑ 発言を促す取組み ☐ 時間外学習を促す取組み ☐ 学習態度を良くする取組み ☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	声楽実技レッスンの場合は１対１で行われるため、各学生の持つ声質、レベル、性格をよく観察する必要がある。特に声質に適した課題を与えた場合とそうでない場合、その成長度合の差は顕著に現れる。そのため、教員の学生の声に対する集中が大切になる。その上で各自に適した課題を与える。これを見誤ると学生は成長しないばかりか、後退にも直結する。				
取組みの効果	各学生に適した課題を与えた場合は、学生自身歌唱しやすく上手く演奏できるため、練習時間が増え成長に繋がる。これにより大いなる上達がみられる。しかし適していない曲の場合は演奏しにくいため練習が疎かにだけでなく勉学への意欲の減退につながる。				
今後の課題	学生に適した曲を与え続けることは不可能だが、教員側の知る曲目の多彩さや学生に対する注意力の如何によって、少しでも多くの適した曲を見つけだせることを期待する。				

授業形態	実技	科目名	主専実技	必選区分	必修
開講学科・学年	大演１～４年		受講者数	各１名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	☑ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	☑ 学習態度を良くする取組み				
	□ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	この科目は個人レッスン科目である。レッスンという形態はいわゆる講義系授業とは異なりかなり特殊な形態をとる。レッスンでは学生が毎週勉強 (譜読み、暗譜、演奏能力の研鑽、音楽への形而上学的取り組み）してきたことに対し教員はより質の高い演奏へ導くための示唆を与える。口頭の場合もあれば、教員が実際に演奏して聴かせることもある。この形態は昨今盛んに言われている双方向授業、アクティブラーニングを既に取り入れているものと考えられる。発言を促すために「作曲家はなぜこの音・響きを要求しているのか？なぜこのモティーフを使っているのか？あなたはこの音にどういう意味を込めて弾いているのか？」等々こちらが質問を投げ掛けることも多い。上記の設問にある全てのことが一対一のレッスン科目においては非常に大切なことであるのであえて全部にチェックを入れた。楽曲の理解を深めるために音楽理論を教え、読むべき書籍を紹介する。意欲・関心を高めるために実際に教員が演奏を聴かせる。時間外学習 (練習）は当然のことながら、さらに意欲を促すために学外で開催される演奏会あるいは CD を推薦、紹介する。またいかに日々の練習における学習態度・精神的態度 (注意力の使い方、集中力の高め方、作品に対する敬意の念を持つこと等々）を高めるかを教育している。				
取組みの効果	教員が模擬演奏し、学生がその場で音、響きを感じるということが一番教育効果が高い。そのことは彼らの感受性を瞬時に喚起し、耳を鋭敏にする。いわゆる「口伝」「芸を盗む」といった日本的な伝統－師弟関係－が西洋音楽を学ぶ中にも生きている。個々の学生の才能には個人差があるため成長は画一的ではないが、ほぼ全受講者に成長が見られる。				
今後の課題	私としてはレッスンに情熱を傾けているつもりでも長年の教員生活の中には音楽に対する情熱、ピアノ演奏に対する情熱を失ってやめてしまう学生もいた。「親にピアノをやらされてきたからなんとなく音楽学部に入ってきた」という学生もおり、難しい対応を迫られる。才能が問われる特殊な世界でもあり、好きでもないこと、あるいは嫌いなことを無理やり教え込むのも罪なことであるのかもしれない。いたし方ないようにも思うが、そういう学生にも希望が見出せる教育があるものか常に考えていきたい。				

授業形態	実技	科目名	オペラ	必選区分	選択
開講学科・学年	大演４年		受講者数	約 10 名	
最も力を入れた取り組みポイント	□　理解を深める取組み ☑　意欲・関心を高める取組み □　発言を促す取組み ☑　時間外学習を促す取組み ☑　学習態度を良くする取組み ☑　その他（　共同作業の体験　）				
どのような方法を取り入れたか	◎オペラの中の役を自分で選んでオーディションを受け、決めることにした。 （オーディションを受ける為には、オペラの内容が解り、自分のやりたい役の理解が必要になる） ◎授業中、みんなの前で独唱、二重唱、重唱を次々演奏してもらう。 （時間外に一緒に練習する必要に迫られる） ◎衣裳を用意したり、小物を制作してもらう。 （舞台に必要なものを自分達で話し合い、考える機会を持った）				
取組みの効果	オペラの授業の始めと終りでは全員のチームワークと活気と意欲が異なる。一つの事を一緒に作り上げることは大学生活で忘れられない事柄の一つになっている。				
今後の課題	一人ひとりの学生の演奏の力を付けることの必要を感じる。				

授業形態	講義	科目名	音楽療法論Ⅰ	必選区分	必修
開講学科・学年	大応１年		受講者数	約 20 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み □ 意欲・関心を高める取組み ☑ 発言を促す取組み □ 時間外学習を促す取組み ☑ 学習態度を良くする取組み □ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	まずは授業初回で、パワーポイントのスライドにて、授業中の私語とスマートフォン禁止を伝える。また学習の見通しを立てて主体的に取り組むことを目指して、前期中の課題（発表、小テスト、期末レポート）の内容と発表分担日、締切等の計画を配布して伝えておく。 その一方で１年生前期の初回授業での緊張をほぐし、２回目以降の授業内において発言しやすい雰囲気をつくるために、グループワークを行う。授業のキーワードになる事項に関するイメージや知識を、時間を制限してなるべく多く書き出してもらい、代表者が発表する。それに対して正誤の判断はせずに、ひたすら肯定的なコメントをして、内容説明につなげる。				
取組みの効果	１年生前期の必修科目で、ある程度の緊張感や期待が保たれている時期の少人数授業のため、必ずしも取組みの成果とは言いかねるが、発表や期末レポートに取り組む姿勢は概ね良好といえる。 教員側の利点としては、初日にグループワークを行うことで、学生の個性が見えて氏名と顔を一致させることができ、２回目以降のコミュニケーションがとりやすくなる。				
今後の課題	課題を授業初回に伝えるのみではなく、簡単なコースパケットのようなものを作成して、授業期間を通して使用する基本的な資料を配布できればと考えている。				

授業形態	講義	科目名	和声法	必選区分	必修
開講学科・学年	大応１年		受講者数	約 20 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み				
	☐ 意欲・関心を高める取組み				
	☐ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	☐ 学習態度を良くする取組み				
	☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	時間外学習を促すため各講義毎に毎回課題を出し、その評価と課題の解説などを授業の後半に行い、講義時間の前半のみ教科の講義とする時間配分で全回の講義を行った。				
取組みの効果	確かに課題の実施によってその部分の内容理解は深まったようだが、予習或いは応用的な勉強は手薄になっていたと思われる。課題をこなすことで理解できていると勘違いしているという感覚が感じられた。				
今後の課題	この失敗から、課題の量と回数を、それぞれの章などにまとめて出すようにし、課題に追われること無く予習､復習の時間を持てるよう工夫した。課題を行うだけでなく、その章における最も重要なことは何かを見つけることに重点を置き、講義時に質疑を行う形をとって、時間外に学習していなければできないようにした。				

授業形態	演習	科目名	ソルフェージュＩＡ	必選区分	必修
開講学科・学年	大応１年		受講者数	約 15 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☐ 理解を深める取組み ☐ 意欲・関心を高める取組み ☐ 発言を促す取組み ☑ 時間外学習を促す取組み ☐ 学習態度を良くする取組み ☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	応用音楽学科の学生は特に入試科目の関係上、基礎能力の中でも、リズム感覚が悪い学生が多い。そのためリズムパターンを書いたプリントを作成し、初見でリズム打ちさせる。これを毎回行い、一人づつでも行う。最初は前から始めるが、出来るようになれば後ろの小節から前に戻る等、ランダムに行う。				
取組みの効果	最初は全く出来なかった学生も、自覚のもとに復習を繰り返すことでパターンに慣れてある程度のリズムであれば初見で出来るようになった。				
今後の課題	１年で必修が終わるので、その後も学生が自覚をもって自主的に課題に取り組んでいくか。				

授業形態	演習	科目名	教育伴奏法	必選区分	選択
開講学科・学年	大応２年		受講者数	約 20 名	
最も力を入れた取り組みポイント	□　理解を深める取組み ☑　意欲・関心を高める取組み □　発言を促す取組み □　時間外学習を促す取組み □　学習態度を良くする取組み □　その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	授業の中でピアノを弾くことには抵抗感があり、積極的に弾いて習得しようという雰囲気がなく、ごく僅かの課題曲を練習してきた学生だけが発表するだけだった。発表しない学生はすべての音楽的指摘、注意事項、緊張感は人事のように捉えているだけで、なかなか力が付かず、試験前にあせるばかりであった。　そこで、すべての学生に１回の授業につき１回以上は弾かせるという方針で、４人前後のグループを作って、１グループで１曲を分割して弾き、協力しあって１曲を完成させるという方法を取り入れた。				
取組みの効果	仲間に迷惑かけないで自分の担当した部分はしっかり弾いて友達にバトンタッチしなければ、と言う意欲を持って取り組むようになった。そしてその出来具合を気にすることにより、練習にも身が入るようになって緊張感も出てきた。授業にも活気が出て、自ら積極的に習得していこうという姿勢が顕著に現れた。				
今後の課題	１、分割して弾くことは分量的負担も減るし、楽しいのでどの曲もみんなで弾きたがり、一人で１曲を仕上げる集中力が足りなくなのではないかと心配。　２、楽しいので、その雰囲気を切り替えるのに多少時間がかかる。　３、弾ける学生にとっては物足りない感じを持たせない工夫が必要。				

授業形態	演習	科目名	音楽療法演習	必選区分	選択
開講学科・学年	大応３年		受講者数	約 20 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	□ 発言を促す取組み				
	□ 時間外学習を促す取組み				
	☑ 学習態度を良くする取組み				
	□ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	自己像・音楽療法観・将来について思っていることの可視化を通じて、専門知識を社会でどのように役立ていけるのかについて深く考える取り組みとして、スマートフォンの動画撮影ツールと、マインドマップアプリを使用した。 ①学生はペアになって、自己紹介の動画を撮影し合う。 ②マインドマップツールを使用して「音楽療法観」「研究」「将来像」を描く作業を行う。 ①・②を通じて気づいた点を発表する。				
取組みの効果	・動画撮影では、自然に話す場面を撮影する例、話す内容にこだわる例、より印象を良く見せようと努力する例など、個々に工夫がみられ、学生間でお互いの個性や表現方法を学び合う機会となった。 ・マインドマップによる学習では、学生個々の進路に向けて、また研究テーマを深めるために必要なアイデアを言語化すること、また学生・教員間で発表・コメントし合うことにより、互いに共通する点や異なる点を知る中で、アイデアがつながったり、今後の目標・計画を具体化できる場となった。 ・スマートフォンアプリの活用は、学生にとってなじみがあり操作・入力しやすいため、すぐに学習に取り組む姿勢がみられ、説明時間も短縮できた。				
今後の課題	・テーマを深めるために必要な時間に個人差があるため、ある程度の期間を設けて授業を行い、制限時間を明確にし、個々に時間外学習で補うなどして発表準備を進める必要がある。また、学習の前後の変化に気づくような過程も必要であった。 ・マインドマップによる学習では、描く内容が見つからない学生へのフォローが必要である。（テーマを、好きなこと、興味のあることなど簡単な内容にするなど。） ・学生間での意見交換が活発になるよう、発表時に使用する機器や形態を工夫する。 ・担当クラスでは、全員がスマートフォンを持っており今回の方法を実施できたが、無料アプリのインストールが容量オーバーで使用できないケースがあり、皆平等の体制で授業を行うためには、インターネット経由で使用できるシステムを活用するか、MM 館の PC の使用が適切であった。 ・動画撮影とマインドマップツールの二つの発表準備を行うために、作業が分散してしまい時間が掛かったため、別々に授業を行う方が良い。				

授業形態	演習	科目名	音楽療法研究法	必選区分	選択
開講学科・学年	大応３年			受講者数	約 20 名
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☐ 意欲・関心を高める取組み				
	☐ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	☐ 学習態度を良くする取組み				
	☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	・学生自身が記録した音楽療法の実習記録の記述文章の計量分析の手法を取り入れた授業を行った。 ・分析には、「KH　CoderKH Coder（樋口耕一）」 計量テキスト分析のためのフリーソフトウェアを使用した。				
取組みの効果	・学生個々が実習記録に用いている言葉を定量化・可視化することにより、臨床場面で注目していた言葉の表現に気づくことや、自分に足りない言葉の表現を通じて新たな課題を見つけることにより、実習での学びを深める機会となったと考えられる。 ・臨床初期から後期までの記録を回数ごとに比較するネットワーク分析の結果（言葉と言葉のつながりの分析）では、学生と対象者との関係性の変化や、臨床で重要となる音楽的要素と対象者に関係する言葉の時系列変化をみることにより、臨床的な視点を考察するための題材となったと考えられる。				
今後の課題	・学生個々の実習記録の内容が充実していないと、分析結果で考察できる点が少なくなってしまう点。（記録提出の苦手な学生への指導を充実する。） ・分析作業を効率的に行うために、視覚的にわかりやすい教材を作成する。 ・分析結果をそのまま文章化して感想を書く例がみられたため、分析結果から考察されたことに重点を置いて報告するように指導する。 ・レポート課題としたため、各々の結果や感想を共有する時間が持てなかった。今後は発表形式で行い学生間・教員相互の学びとなるような工夫が必要。				

授業形態	演習	科目名	楽器・合奏指導法	必選区分	選択
開講学科・学年	大応４年		受講者数	約 20 名	
最も力を入れた取り組みポイント	□ 理解を深める取組み ☑ 意欲・関心を高める取組み □ 発言を促す取組み ☑ 時間外学習を促す取組み □ 学習態度を良くする取組み □ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	･授業の中盤からグループ別学習を行い、その総括として最終回に成果発表を行った。 ・最終回における各グループの発表内容については、学生相互に評価を行った。全てのグループが何らかのかたちで表彰される様、「編曲」、「演奏」、「インパクト」、「ユーモア」といった異なる観点から成る評価項目を設けた。採点と集計については、スマートフォンや携帯電話などに互換性をもち、ID やパスワード設定などで保護された Web アンケートを用いた。 ・楽譜作成ソフト finale を用いて、明治時代以降の童謡・唱歌等楽譜のデータベースを作成し、授業において活用できるよう、μ Cam のコースにリンクを設けた。また、時代背景や楽曲に ついて調べることのできるサイトのリンク集をμ Cam に 掲載し、学生の自主学習を促進した。				
取組みの効果	・テーマにふさわしい選曲・編曲をはじめ、発表に至るまでの計画立案と遂行を各グループで行い、学習を進めることができた。ただ昨年度は、就職活動による公欠者がたまたま重なったために、練習が成り立たなくなるグループもあった。 ・成果発表に対する学生相互の評価については、いくつかの項目にわたって高評価となるグループもあったが、各グループが何らかの賞を受賞することができた。 ・Web アンケートを利用することにより、スムーズな採点と集計が可能となり、その場で集計結果をフィードバックすることができ、学生個々の達成感につながったのではないかと考える。 ・μ Cam コース内に設けたデータベースなどのコンテンツには、学生が個々に調べた楽曲情報などが蓄積されており、授業のみならず、音楽療法の実習の場への、学生による利用頻度は比較的高いようである。				
今後の課題	・学習の成果を実質的に活かせる場として、今年度は、音楽療法研究室にて音楽療法を利用する障がい児とその保護者に向けた発表の機会を予定している。 ･就職活動時期の変更に伴い、同一グループ内に数人の公欠者が出てしまった場合は、それを補えるよう十分期間を設けたり、グループ編成を考慮することが必要である。				

授業形態	実習	科目名	音楽活用実習	必選区分	選択
開講学科・学年	大応４年		受講者数	約 20 名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	☐ 発言を促す取組み				
	☐ 時間外学習を促す取組み				
	☐ 学習態度を良くする取組み				
	☐ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	外部（西宮市文化振興財団）より委託された親子コンサートの企画立案をさせた。その際に、学生が主体的に参加することを促すために、親子コンサートを開催するかどうかの選択から取り組ませた。しかし、開催するかどうかの選択を学生にさせたため、予想に反し学生は、開催したくないという結論に至ってしまった（失敗点。なお昨年度の学生は積極的に開催したいという意識であった）。そこで、再度西宮市と協議した結果、やはり学生企画を希望しているため、そのことを学生に伝え、最終的には開催することになった。開催が決まってからは、自主的に企画案を練っている。コンサート開催自体は、教員が半ば強制的に決める必要があったと思う。開催が決まってからは、学生間の推薦により学生代表を決めている。				
取組みの効果	昨年度の例では、学生に代表を選出させたことが大変効果的に機能した。自ら選んだゼミ代表であるため、代表に選出された学生は責任感が増し、また他の学生たちも積極的に代表補佐をしたり、指示を聞き入れる体制が整った。また、代表を含め、役割分担（企画立案、広報、会計など）ごとの代表は、西宮市との打ち合わせなども、教員を通さずに行う部分を設けたため、責任感や自立心が非常に高まった。組織体制については、学生に決めさせ、外部との打ち合わせなども、部分的に任せる（教員は背後で見守る）ことが、責任感を持って積極的に参加行動することに繋がると考えられる。				
今後の課題	学生の特色は、毎年異なるため、大きな枠組み自体は教員が決定し方向付けする必要があると感じられた。				

授業形態	演習	科目名	歌曲特殊研究Ⅱ	必選区分	選択
開講学科・学年	大声専１年		受講者数	１名	
最も力を入れた取り組みポイント	☑ 理解を深める取組み				
	☑ 意欲・関心を高める取組み				
	☑ 発言を促す取組み				
	☑ 時間外学習を促す取組み				
	□ 学習態度を良くする取組み				
	□ その他（　　）				
どのような方法を取り入れたか	日本語を美しく発音、歌う為に楽曲の内容、背景等を説明。想像力を高める努力をさせる。 また、詩と音楽が一体となるようにテクニカルな面でも理解、納得出来る指導を心がけている。				
取組みの効果	受講生が音楽を表現出来る下地を整える事で、楽曲のレベルが上がってくる。				
今後の課題	頭で考え、楽曲を芸術的な高みにまで表現出来る呼吸法を身につけさせる事。				